



連想のための環境演出へ向けて

ここしばらく、このコラムでは集団的な情報創造について、またそれを可能にする「気づき」について書いてきているが、実際、気づきはどのように実現されるのだろうか。

いろんな見方があるとは思いますが、パーソナルな気づきはある「きっかけ」と、それによって引き起こされる「連想(想像の連鎖反応)」によってもたらされると考えてよさそうだ。そこで、われわれが目指している情報創造とは、発話や文字、図など、連想の中間的な表現を通じてこの連鎖反応に他人を巻き込みながら、気づきを情報としてまとまった形へ収束させることだと想定して話を続けてみよう。

われわれが何かを頭の中から引っ張り出すとき、アテにするのは「記憶」である。記憶は、後々必要となった時に取り出しやすいように情報をしまっておくことである。付け加えれば、単にそれをそのまま引き出すだけでなく、複数の記憶を統合的に組み合わせることが「発想」につながるとされる。

多くの人は、きちんと覚えていなければモノ・コトは思い出せないとか、きちんと知らなければ思い出したり想像したりはできないと思っている。だが、われわれは実は経験したありとあらゆることを記憶しているのだという説もある。そして、肝心のことを思い出せないのは、思い出す「きっかけ」が見つからないからであるというのだ。この説に従えば、記憶におけるきっかけの存在は非常に大きいのである。

数年前のある日、何をしていたかを思い出すのは不可能に近いと思われる。だが、昔のスケジュール帳に書かれた殴り書きを見たり、テープに入った音声などを聞けば、その当時の様子を思い出すことはそんなに無理ではない。

また、別のかたちの想像力のすごさに気づかされることもある。あることを考えている自分に突然気がつき、どうして自分はこんなことを考えていたのかと思いを巡らしていくと、どんどん連想をさかのぼっていくことができる。その結果、偶然目にした何かがかきかけであったことに気づいて、予想外のイメージの展開にびっくりすることもあるはずだ。



実際、こうした想像力はヒト固有の非常にユニークな能力であり、これをマシンに代理するよう要求するよりもヒトのこうした能力を高める仕組みを考えたい。しっかりした想像力さえ備えていれば、あとはきっかけと方向づけだけでよい連想が導きだせそうだ。

ではこうしたことを考えたうえで、マシンは連想する主体であるヒトをどのように支援すべきなのだろうか？

発想支援という、シソーラス(類語辞典)を使って間接的に想像の連鎖形成を刺激するというアプローチを思い浮かべることが多い。だが、本当に追求すべきは、このように個人の経験と記憶、連想というつながりを円滑化していくことである。きっかけと連想をうまく動かすひとつのポイントは、経験あるいは場というコンテキストの再生にあり、この演出にすべてがかかってくるのではないかと思う。

会議の席上、他の参加者の発言の一部を聞いて、ハタとひらめいたとしても、途中で口に出すわけにいかず、ぐと飲みこんだ途端に忘れてしまう。

こうしていったん失われたきっかけを取り戻そうとするなら、まずは自分がどのような枠組みの中でモノを考えようとしていたかを追体験できるように場を再構成することが望ましい。そのなかで、放り出さざるを得なかった「ひらめき」の断片を拾い集め、再考し、落ち着いて新たな方向に向けて発展させるのである。

情報創造支援のための装置とは、場のコンテキストを再生するなかでこぼれおちた発想の断片を提供することによって、気づきと連想を喚起する仕組みである。そのためには場における意識の状態を身体動作や音声など多様なモードの刺激を通じて想起させなければならぬ。意識の再生技術としてのマルチメディアの可能性を改めて考えなおすことが必要になってくると思う。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp